

## 文成立論研究史抄（その1）

### A Brief History of the Research on Sentence Formation Theory (Part1)

小亀 拓也

KOGAME, Takuya

【キーワード】 陳述論, 山田孝雄, 時枝誠記

#### 1. はじめに

本稿は、文成立論の現在までの流れを記述しようとするものである。筆者はかつて、旧稿（「聞き手における文の認定」『日本語文法』21巻2号）で(1)を挙げ、話し言葉においては同一の語列（音声連続）であっても文認定が異なる場合があることを示した<sup>1</sup>。

(1) a. ええ、いつだって先生がwinner。僕はloserです（微笑）

（『リーガルハイ 2 【脚本】』）

b. ええ。いつだって先生がウィナー、僕はルーザーです。

（<http://www.dramanote.com/article/380461921.html>）

c. ええ。いつだって先生がウィナー。僕はルーザーです。

（<https://ameblo.jp/pikataa3/entry-11689762844.html>）

その際、(1)のような言語事実が従来の文成立論で検討されてこなかったこととして、①従来の文成立研究が、話し手と聞き手という視点を越えた「超越的な視点」からの文成立論を志向するものであったこと、②時枝誠記氏以降の文成立論（戦後陳述論）においては、文の成立を文の内部構成のあり方に関係づけて語ろうとするものが大勢であったこと、この二点を挙げた。後者②の点については尾上圭介氏がこれまでの論者の主張を跡づけながら随所で説くところであるが（尾上 1990, 1996 など）、前者①の点については特段の検討がなされていないように思われる。

そこで、本稿では上記①の点について、これまでの文成立研究を繙きながら点検してみたい。その最終的な結論は紙幅の関係上「その2」以降で示すことになるが、先取り的に述べておくと、<sup>1</sup>「従来の文成立論は、（論者自身の意識としては）あくまで言語記号としての文の成立を志向するものであった」こと、ただその一方で、「その内実は個別具体の言語主体（話し手）における文の成立を説くことになっていた」こと、この2点を主張することになるであろう。

---

1 (1) は、テレビドラマ『リーガルハイ 2』の台詞を異なる言語主体が文字に起こしたものであり、(1a)(1b)(1c)で句読点の表記が分かれていることがわかる。旧稿では、(1a)には発話者（俳優）の文認識が、(1b)(1c)には観察者（視聴者）の文認識がそれぞれ反映されているものと解釈した。

以上が本稿の主たるねらいであるが、もう一つ、本稿で示しておきたいものがある。それは、文成立論史の大きな流れである。文成立論（陳述論）の展開については、仁田（1977, 1978a, 1978b, 2005）や尾上（1990, 1996）、近年のものでいえば竹林（2004, 2008, 2020）や大木（2015, 2017）といった優れた研究がすでに存在する。そのような研究状況の中で、今なぜ文成立論史をあらためて記述しようとするのか。それは、上述の成果が「特定の学者の説の詳細な検討を展開するもの」であるか、「研究者自身の論の展開のために部分的に検討されたもの」であるか、あるいは「文成立論を分類することを目的に論じられたもの」のいずれかであって、文成立論の大きな流れというものを掴むことが必ずしも容易でないように思われるからである<sup>2</sup>。本稿では、特定の学者の説に軸足を置くことなく、自説展開のための学史整理という色合いもなるべく抑えつつ、また文成立論を分類すること自体を目的とせず、文成立論史の流れの要点を淡々と記述することを目指したい。本稿を「研究ノート」とする所以である。

以下、本論では、「これまでの文成立論はどのような言語事実を対象に、どのように論じられてきたのか」「どの点が難点と意識され、それに対してどのような克服が図られたのか」という2点について適宜検討することで、文成立論史の大きな流れを示すことを目指す。まずは文成立論に関する教科書的な記述を足がかりに、文成立論史の概要を掴んでおこう。森山卓郎氏は文成立論史の展開を次のように、明快かつ簡潔にまとめている。

「文とは何か」という問題は、文法研究の根底的大問題であった。

日本文法研究の中心的な流れの一つである陳述論は、文の成立の契機を、叙述内容の成立の問題としてとらえる<sup>1</sup>ところから、言語における主体と客体という問題<sup>2</sup>へと進み、さらに、叙述内容の成立（叙述）とそれに対する話し手の主体的関与（陳述）とに分析する<sup>3</sup>ところまで至った。叙述内容（コト＝プロポジション）と主体の関与（ムード）から文の成立を考えるという基本的な認識<sup>4</sup>は、世界における日本の言語学の一つの成果とみてよいであろう。

（森山 1988：227，下線，数字および網掛けは本稿筆者による）

下線部，<sup>1</sup>は山田孝雄氏（以前）の文成立論，<sup>2</sup>は時枝誠記氏の文成立論，<sup>3</sup>は渡辺実氏の文成立論，<sup>4</sup>は仁田義雄氏をはじめとする論者の文成立論（モダリティ論）の捉え方である。本稿（「文成立論研究史抄（その1）」）では，<sup>1</sup>から<sup>2</sup>に至る流れを記述する。<sup>1</sup>の山田孝雄氏（以前）の文成立論を本稿2節で，<sup>2</sup>の時枝誠記氏の文成立論を本稿3節で見えていくことにしたい。なお，<sup>3</sup>以降の文成立論については，紙幅の関係上，続稿にて論じる。

2 なお、仁田（2005）の第1部第1章「陳述論争大概」、仁田（2014）や尾上（2014）は、文成立論史の流れを理解する上で恰好の論文類である。ただし、その流れを巨視的に示すためか、引用等は少なくなっている。本稿は各論者の主張を踏まえながら流れを掴むことができるように、適宜引用も示していく。引用は原文通りを旨とするが、漢字字体は現行の通行字体にあらためることとする。

## 2. 山田孝雄氏（以前）の文成立論

### 2.1 山田氏までの文把握

山田孝雄氏が登場するまでは、「文」は、概略、意味的に完結したものであり、また必ず主語と述語があるものとして把握されてきた。その代表的なものとして、大槻文彦氏『広日本文典』の次の説明を挙げることができるだろう。

言語ヲ書ニ筆シテ、其思想ノ完結シタルヲ、「文」又ハ、「文章」トイヒ、未ダ完結セザルヲ「句」トイフ。（中略）主語ト説明語トヲ具シタルハ、文ナリ、文ニハ、必ず、主語ト説明語トアルヲ要ス

（大槻 1897：251-252）

大槻氏の言う「説明語」はいわゆる「述語」に相当するものであるから、文は基本的に主語と述語という成分から成るものであると把握されていたことになる。

### 2.2 山田氏の文把握のコンセプト

この「文＝主語＋述語」という理解に異論を唱えたのが山田孝雄氏であった。山田氏は、いわゆる一語文が「文」として存在するという事実を重く受け止め、次のように述べる。

とにもかくにも一の単語もて一の思想をあらはすことは現に人のなせる方法なり。文法家の意見を以て、之を否定することは能はざる現実の事柄なり。

（山田 1908：1179）

従来の定義の容れられざる事情の存する当面の事実は一の語にて一の文をなすもの存すといふことに存するを見るべし。これによりて考ふるに、一の句とは何ぞやといふ事の正確なる見解を得むとするものは先づこの一語が一文たりうる事実を基礎として考へを進めざるべからず。而してこれ実に文として認めらるべきものゝ最も単純なる事実にしてこれよりも一層単純なる句又は文のありうべからざるは明かなる事実なることを考ふる時は、この事が、句論研究の真正の出発点たるを認むべきなり。

（山田 1936：914）

このように、一語文もまた「文」であるのだと積極的に説いた点に、山田氏の慧眼を見てとることができよう。上記の山田氏の引用は「一語から成る文もある」という解釈を述べたものであるが、では、山田氏は「文」の形式的要件をどのように理解するのであろうか。その理解は、先に述べた「文＝主語＋述語」という把握とどのような関係にあるのだろうか。以下、少し長くなるが、山田氏が丁寧に説明している部分を引用する。

吾人はこゝに「犬」の突然襲ひ来れるときに、直ちに

犬

と叫び、或は火災の起れるを告げむとて

火事

と叫びたりとせよ。これ即ち感情の発表といひて差支なきことなり。或は又水を呑みましと思ひて、しかもその急迫せる場合に

水

と叫び、或は又菓子を乞ふ場合に

菓子々々

といふが如きはこれ即ち欲求の発表といひて差支なきことなりとす。而して感情欲求のこの発表は如何なる形式をとれるかといふに、これはたゞ一語のみなれば主格述格の区分を求むべきよすがもなきなり。然らば、これらは文にあらざるかといふに、ある思想を発表せること明かなれば、文といふに差支なきなり。即ちこの場合の「犬」「火事」「水」「菓子」は語として見れば一語なるが、文として見れば一の文なるなり。そのこれを一の文として見るといふことは、これを或る思想の発表として用ゐたるが為にして、その外形は唯一の語に止まりて単純なるやうなれど、内部には思想の複雑なる活動の存するありて、その発表が、この一語によりてなされたりといふに止まるのみ。

(山田 1936 : 912-913)

上記引用の通り、山田氏は、「主語＋述語」といったような形式的な側面からは文を十全に規定することはできないと考え、ある思想（感情や欲求）を表現していることに文成立の根拠を見ようとする。ここで「文＝主語＋述語」という外形的な規定は棄却されることになり、代わりに内容的側面からの規定が試みられることになる。ここで登場するのが「思想」という概念である。山田氏における「思想」は、以下のように、一語文のみならず複数の語から成る文においても「文」を規定する概念である。

一の語又は語の数多の集合体が、文とするを得る所以のものはその内面に存する思想の力たるなり。

(山田 1936 : 901)

つまり、単なる一語であれ、語が複数並んだものであれ、それが「文」であるということが出来るのは、その一語ないし複数の語の内に存在する「思想」の力によるのだと山田氏は解するのである。では、仮に文認定の根拠が山田氏の言う通り「思想」に存するとして、問題はその「思想」の内実である。文を文たらしめるところの「思想」について、山田氏は次のように述べる。

文のこの内面の要素は所謂思想と称せらるゝものなり。今吾人はこの思想につきて研鎮せむ。

抑々文は思想を完全にあらはしたるものなりといふことは何人も認むる所なり。而して単文は単一なる思想をあらはしたるものなりといへり。然らばその単一なる思想とは何ぞや。惟ふにその思想とは人間の意識の活動せる状態にして各種の観念が或る一点に於いて関係を有し、その一点に於いて統合せられたるものならざるべからず。この統合点は唯一なるべし。意識の主点は一なればなり。この故に一の思想には一の統合作用存する筈なり。今之を仮に統覚作用と名づく。この統覚作用これ実に思想の生命なり。雑多の観念累々として堆積すとも之に対して統覚作用の活動することなくば終に思想たること能はざるなり。ここに於いて単一なる思想とは何ぞやといふことに答ふるを得べし。曰はく、単一なる思想とは一の統覚作用によりて統括せられたるもの、換言すれば、統覚作用の唯一回の活動せるものをさすなりといふを得べし。

（山田 1936：916）

上記引用部分より、（単一なる）思想とは、人間の意識の活動によって個々の観念が統合されたものであるということがわかる。そして山田氏はこの統合作用を「統覚作用」と呼ぶのである。つまり、文を文たらしめる「思想」は統覚作用によって成立するのである<sup>3</sup>。

ここで山田氏の文法論で「文」を規定する全ての概念が出揃ったことになる。山田氏は「文」を「統覚作用によりて統合せられたる思想が、言語といふ形式によりて表現せられたるもの」と定義する（山田 1936：902）。以上が山田氏における文把握の要諦である。

### 2.3 山田文成立論の学史的展開（山田氏の文把握の美点と残された課題）

山田氏の最大の功績は、「文＝主語＋述語」という従来の文規定には収まらない一語文的表現もまた「文」であるのだと主張し、（通常の述語文と同様の説明原理で）「文」を再規定することに成功した点にある。一語文的表現もまた「文」であるという捉え方は現在の文法論まで受け継がれていることから、その影響の大きさを窺い知ることができよう。

ただ、山田氏の文把握は、後世の学者には弱点を多く含むものとして理解されることになる。弱点とされたものの多くは、仁田（1977）も随所で指摘する通り、山田氏の論の誤読・曲解に基づくものであり、山田氏の論の内部においては問題とならない点も数多く含まれるのであるが、皮肉なことに文成立論の学史はこの誤解の上に展開していくことになる。

たとえば、その中には「陳述」という言葉に対する誤解も含まれる。1940年代から70年代にかけて文の成立についてなされた議論は「陳述論争」と呼ばれたが、それは「陳述」という言葉が、

3 山田氏のこの主張は、仁田（1977：86）が説く通り、「文であるかどうかの決め手が、それが「思想」を表しているかどうかであり、さらに、その「思想」の成立に「統覚作用」が不可欠であるということによって、文には必ず「統覚作用」が存在する（した）ことになり、文が成立するためには「統覚作用」が不可欠の要素・要件であるものとして解釈される。

学史上「文を成立させるもの」として理解されてきたからであった。しかし山田氏にあって「文」を成立させるものは「統覚作用」であって、「陳述」ではないことはここまでの論述からも明らかであろう<sup>4</sup>。つまり、後世の学者によって、「文を成立させるもの」＝「陳述」と誤って理解され、その誤った理解に基づき議論が展開されていったのである。

本稿は文成立論史の展開を追うものであるが、その歴史は先行する文成立論の乗り越えとして存在する。以降の文成立論の展開を追う上で、たとえ誤読や曲解の結果であっても、山田氏の論に残る（ものと解された）課題について検討しておく必要がある。

まず山田氏の論の弱点（と解された点）の一つ目は「句」と「文」の区別が不分明である、という点である。山田文論における「句」と「文」の関係と両者の概念的な違いは、次の引用部分に端的に示されている。

吾人の句と称するものは思想発表の一単位をさしたるものにして文の素たるものなり。  
（中略）。その句は之を運用するにあたりて文をなす。文とは句の実地に運用せられて人間の思想発表の用に供せられたる場合の名なり。

（山田 1908：1387）

山田氏にあって、「句」は文の素材、「文」はその素材が運用されることによって形作られるもの、として理解される。上記引用部分からわかるように、「文」と「句」はそれぞれ次元の違った存在として把握されている<sup>5</sup>。しかし、同時に山田氏はこの「句」の成立に関して、

一つの句とは統覚作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の発表をいふ。

（山田 1936：917）

と、先述の「文」の定義と非常に似通った把握を提示しており、その差が必ずしも明らかでない。すなわち、上述の「句」の規定も、「文」の定義と同じく「統覚作用」によって規定され、両者

4 なお、山田氏の「陳述」を理解するには、山田氏の「句」が、呼格体言を中心に形成される「喚体句」（例：「美しき花かな」「妙なる笛の音よ」「花もが」など）と、述格を中心に構成される「述体句」（例：「花美し」「雪降りけり」など）との二種類に大きく分けられるという事実を知っておかねばならない。「陳述」というのは、まずもって、「述体句」の述格に立つ資格を有する用言を規定するために用いられる言葉なのである。

用言には属性をあらはすもの多きこと上述の如くなれど、その用言の用言たる特徴は実にその陳述の作用をあらはす点にあり。

（山田 1936：148-149）

「陳述」は用言を述格とする述体句成立の際の不可欠な成分となる。ここで「(述体)句」の成立と「陳述」とが結びつくことになり、後に、文の成立には（統覚作用ではなく）「陳述」が大きく関わるのだと把握され、（戦後）陳述論と呼ばれる一連の議論を巻き起こすことになるのである。

5 この点については仁田（1977：92）の以下の記述が正確でわかりやすい。

文と「句」は、山田文法においては、「素」としての「句」（つまり文を形作っている単位体としての「句」）と、「運用」としての文（「句」が運用されることによって形成されるところの文）というふうにレベルの異なった存在なのである。「句」は文の素材であり、その意味で潜在態であり、文は、素材が運用されることによって形成された一つの実現態である。文を分析すれば、その素材たる「句」に至り、そして、素材である「句」を使って文が形成されるのである。このように、「句」と文とは明らかにレベルの違った存在である。

の区別がわかりにくいものとなっているのである。山田氏の文法論が大きく「語論」と「句論」から構成されることからわかるように、山田氏が著書の中で説かれたのは文の素材たる「句」の成立論であったのだが、上に示した両概念の近接性により、いつしか「文」の成立論として解釈されることになる<sup>6</sup>。このように、後世の学者にほとんど同じものと解されるほどには、「句」と「文」の概念は近く、またその違いは明瞭ではなかったのである。

山田氏の論の弱点（と解された点）の二つ目は二種の句（「述体の句」と「喚体の句」）が共に「句」でありながら統一的に説明できないとする点である。山田氏において両者は共に「統覚作用」によって成立するものと把握されるのだが、次の引用部分にあるように、その「統覚作用」の実現の方法、山田氏の言葉で言えば、思想の「発表形式」は根本的に異なるものと了解されるものである。

わが国語の句に於いては根本的に差別ある二種の発表形式の存することを認めざるべからずと信ず。その命題の形をとれる句は二元性を有するものにして理性的の発表形式にして、主格と賓格との相対立するありて、述格がこれを統一する性質のものにして、その意識の統一点は述格に寓せられてあるものなり。この故に今之を述体の句と名づく。次にその主格述格の差別の立てられぬものは直観的の発表形式にして一元性のものにして、呼格の語を中心とするものにして、その意識の統一点はその呼格に寓せられてあるものにしてその形式は対象を喚びかくるさまなるによりてこれを喚体の句と名づく。而して国語の一切の思想発表の形式は根本に溯れば、この述体の句、喚体の句の二種に帰するなり。

（山田 1936：935-936）

しかし後世の把握においては、この点が弱点と解され、「統覚作用」の実現の方法も一本化されるべしということになるのである。特に、述体句が述格の「陳述」により成立するとした把握を「文の成立」の図式の中心に据え、喚体句の成立にも敷衍しようとしたのであった。

山田氏の論の弱点（と解された点）の三つ目は、文を形態的に規定することができない、ということである。そもそも山田氏は一語文的表現をも文として認定する道を選ぶに際して、形式的な側面から文を規定する道を自ら絶ったのであったから、山田氏からすればこのような批判は問題にもならないであろうが、一方で「思想」や「統覚作用」といった主観的な観点によってのみ文が定義されるということを批判的に受け止めた学者も多い。以後の文成立論の展開は、山田氏の文論の美点、すなわち一語文を「文」として認め、いわゆる述語文と同じ原理（「統覚作用」の

6 仁田（1977：93）はこの点について、次のような見解を示している。

後の山田批判には、山田の成立論を「文成立論」としてのみ見立てて批判しているものが少なくない。これが、山田文法の正しい理解、批判でないことは言うまでもない。山田の「陳述」の論に対する後の理解・批判・発展継承も、同じような傾向にある。「句」についての「陳述」の論が、いつのまにか無反省に「文」についての「陳述」の論として成り上がってしまうのが、「陳述」の論の山田以後の歩みである。

発動による「思想」の形成)によって説明したという点を維持しつつ,上記三つの残された課題(と後世の学者に解されたもの)を克服していく歴史の展開として了解することができる。

### 3. 時枝誠記氏の文成立論

#### 3.1 時枝氏の文把握のコンセプト

##### 3.1.1 言語過程説と詞辞論

本節では時枝氏の文成立把握を見ていく。時枝氏の文成立論は山田氏の弱点(と時枝氏が解するもの)の乗り越えとして読むことができる。まず時枝氏の文成立観を理解するためには、時枝氏が「言語は、人間の表現行為そのものであり、また、理解行為そのものである(時枝 1955:7)」とした、「言語過程説」の考え方を踏まえておく必要がある。以下の引用部分は特に重要である。

言語が、表現理解の行為であるといふことは、言語は、常に表現主体或は理解主体、一般的に云つて、言語主体(言語を成立させる人間)を、不可欠の条件として成立するものであることを意味する。(中略)言語過程説の最も著しい特色は、一切の言語的事実を、言語主体の意識、活動、技術に換言して説明しようとするところにある。

(時枝 1955:7-8)

このように時枝氏の言語観では、言語主体が特に重要な位置に置かれる。当然、この把握は時枝氏の文論・文法論全体にも前提され、時枝文法論の「詞」と「辞」の論の中にも色濃く反映されることになる。この「詞」と「辞」という概念は、時枝氏の文成立論にも大きく関わるため、まずは時枝氏による詞と辞に関する規定を確認しておこう。時枝氏は語を詞と辞に大別し、それぞれの性質を次のように示す。

(詞の性質について)

- 一 表現される事物、事柄の客体的概念的表現である。
- 二 主体に対立する客体化の表現である。
- 三 主観的な感情、情緒でも、これを客体的に、概念的に表現することによつて詞になる。
- 四 常に辞と結合して具体的な思想表現となる。
- 五 辞によつて統一される客体界の表現であるから、文に於ける詞は、常に客体界の秩序である「格」と持つ。

(時枝 1950:66)

(辞の性質について)

- (一) 表現される事柄に対する話手の立場の表現である。
- (二) 話手の立場の直接的表現であるから、つねに話手に関することしか表現出来ない。



（三） 辞の表現には、必ず詞の表現が予想され、詞と辞の結合によつて、始めて具体的な思想の表現となる。

（四） 辞は格を示すことはあつても、それ自身格を構成し、文の成分となることはない。  
（時枝 1950：162）

時枝言語過程説にあつて、詞は「概念過程を含む形式」、辞は「概念過程を含まぬ形式」とも規定されるものである<sup>7</sup>が（時枝 1941：231）、学史上重要なのは、詞と辞が厳しく区別されるものであるということである。

語を詞と辞に二大別することは、語の意味内容によるものでもなく、又語が独立するか否かによるものでもなく、実に語の最も根本的な性質に基づく分類である。換言すれば、語それ自体に分類基準を求めた処の分類である。語における一切の他の分類は、皆この二大別の下位分類と見るべきである。

（時枝 1941：234）

この立場は、詞と辞が截然と分かれるものとして把握し、両者の間の連続性を決して認めない、「詞辞非連続」説と呼ばれるものである。以上、時枝氏の文成立論を理解するために必要な概念について最低限の説明を付した。この時点では「詞」や「辞」が具体的にどのような表現であるのか掴みにくいものと思われるが、次節以降の記述を読めば理解できるものと思われるので、上記の「詞」と「辞」の性質をおさえた上で、次節に進みたい。

### 3.1.2 文成立の三条件

さて、時枝氏が文の成立をどのようなものと捉えているか、確認していこう。時枝氏は「文」を、次の三条件によって規定する。

- （一） 具体的な思想の表現であること。
- （二） 統一性があること。
- （三） 完結性があること。

（時枝 1950：231）

非常に簡潔な規定であるが、時枝氏は（一）（二）（三）をどのようなものとして把握しているのだろうか。以下、順に見ていくことにしよう。

---

7 時枝（1941：231）によれば、「概念過程を含む」ものとは、たとえば「山・犬・走る・嬉し・悲し・喜ぶ・怒る」など、「表現の素材を、一旦客体化し、概念化してこれを音声によつて表現」するものを指し、「概念過程を含まぬ」ものとは、否定の助動詞「ず」、推量の助動詞「む」など、「観念内容の概念化されない、客体化されない直接的な表現」を指す。

時枝氏は上記(一)「具体的な思想の表現であること」の側面について、次のように述べる。

具体的な思想とは、客体界と主体界との結合において成立するものである。従つて、具体的な思想の表現とは、客体的なものと、主体的なものととの結合した表現において云ふことが出来るのである。文とは、このやうな具体的な思想を表現するものである。(中略)

犬だ。

といふ表現になると、客体界の表現「犬」と同時に、それに対する判断が、「だ」といふ語によつて表現されて、ここに主体、客体の合一した具体的な表現が成立する。これが即ち文と云はれるものである。

(時枝 1950 : 232)

時枝氏の詞辞把握に従えば、上記の文成立観は、「詞」によって表わされた客体的な内容を、文末「辞」の主体的作用が包み込み、また統一することで文が成立すると把握するものであるとまとめておくことができよう。

このような把握は、「犬だ」のような文末が助動詞である場合には特に問題はないが、一方で「降る」「寒い」といった動詞や形容詞の終止形が単独で文を終える場合に問題となる。時枝氏によれば動詞や形容詞は詞であるから、時枝氏の理論的枠組みに従えば、具体的な思想となるためには助動詞のような主体的表現と結びつく必要がある。しかし、たとえば「雨が降る。」などは統一する辞が存在しない(表現末尾が「降る」という詞のみである)のにもかかわらず、文は成立しているという。このように、言語事実と理論的枠組みとが矛盾するという問題が生じてしまうのである。

時枝氏はこの問題を、次に示すように「零記号の陳述」「零記号の辞」といった概念を用いることで解決するのである。

判断的陳述を表す処の文としての「降る。」「寒い。」といふ表現も、陳述が「降る」「寒い」に累加してゐると考へるよりも、或は又これらの語が本来陳述作用をも同時に表すものであると考へるよりも、次の図の如く、

降る ■

寒い ■

零記号の陳述■が、「降る」「寒い」といふ語を包んでゐると考へるのが妥当であると思ふ

(時枝 1941 : 243)

つまり、動詞や形容詞の終止形に助動詞のような主体的表現に与る表現が後接しない場合も、零記号の辞が後接することで具体的な思想の表現となっているのだと説明するのである。このように考えれば、たしかに表面的な矛盾は一旦解消されることになる。以上、文成立の三条件の（一）の内容を確認した。

続いて、（二）である。時枝氏は「（二）統一性があること」については、次のように述べる。

我々がそこに文を意識し得るのは、思想の統一があるからである。思想が如何にして統一的に表現されるかといふことは、国語に於いては、専ら辞の総括機能に基くものである。

（時枝 1941：351）

文に統一性があるといふことは、それが纏つた思想の表現であることを意味する。如何に語が連続してゐても、纏まりのないものは文とは云ふことが出来ない。（中略）文の纏まりは何によつて成立するかといふならば、それは語手の判断、願望、欲求・命令・禁止等の主体的なものの表現によるのである。

（時枝 1950：234）

つまり、ある表現が文であるとするためには、話し手の主体的な表現としての辞が総括機能を発揮することによって思想を統一する必要があるのである。これは実質、「（一）具体的な思想の表現であること。」で見た内容と同じことであり、いずれも詞と辞（助詞、助動詞、零記号の辞）の結合によって実現されると言うことができる。

ただ、この（一）（二）のみでは、通常文とは見なされることのない「花が」や「裏の小川はさらさらと流れ」といった詞＋辞の構造をもつものも、すべて「文」であるということになってしまう。そこで、時枝氏は「完結性があること」を第三の条件として掲げる。時枝氏にあつて「完結とは客観的に規定された事実（時枝 1941：358）」なのであつて、つまりは以下のように形態的に規定されるものである。

この表現が文であると云はれるためには、表現の最後が、終止形によつて切れる形をとることが必要な条件となる。

（時枝 1950：239）

このように、最終的に「文」であると言うためには、「完結性があること」、すなわち表現末尾の動詞・形容詞や助動詞が終止形となることが必須ということになる。以上が、時枝氏の文成立論の要点である。

### 3.2 時枝文成立論の学史的展開（時枝氏の文把握の美点と残された課題）

さて、3.1 節の冒頭で「時枝氏の文成立論は山田氏の弱点（と時枝氏が解するもの）の乗り

越えとして読むことができる」と述べたが、本稿2.3節で示した山田氏の論において弱点と解された点は、時枝氏においてどのように克服されたのであろうか。

まず一つ目に、山田氏の論にあっては「句」と「文」の区別が不分明である、ということがあった。この点が文の成立の観点から問題となることを批判しつつ、時枝氏は次のように述べる。

イ. 山に登る。

ロ. 山に登るは愉快なり。

(イ)(ロ)は、共に「山に登る」といふ句を以て構成された文であるといふことはいへるのであるが、何故に(イ)に於いては、「山に登る」といふ句が運用上文といはれるにも拘はらず、(ロ)に於いては、それが句であつて文とはいはれないかの根拠を見出すことが困難である。(ロ)の「山に登る」の如きを、山田氏は一個の文の一部即ち独立せざるものとして、(イ)の場合とは別に扱はれたのである。これは、暗黙の中に、(ロ)が語意不絶句であることを認めたのであつて、二個以上の文の集合体ではないのである。(ロ)の場合は独立せず、(イ)の場合は独立してこれを文といふことがいはれる為には、統覚作用以外の別の考を加へなければいふことの出来ないことである。我々の要求することは、(イ)に於ける「山に登る」と、(ロ)に於けるそれが、元素的に見て同一であることを知ることではなくして、最も肝要な問題は、(イ)(ロ)の「山に登る」が、夫々本質的に如何なる点が相違してゐるかといふことでなければならない。山田氏の研究は、文に於ける単位を決定することは出来たであらう。しかしながら、氏は、句の運用によつて成立した一個体である文と、文中に存す句との根本的な相違点については、遂に何ものをも規定することが出来なかつたのである。

(時枝 1941 : 341)

2.3節で見た通り、時枝氏は、山田氏が「句」の成立について論じようとしていたものを、「(「文」成立論として読んだ上で、)上記のように批判しているということには注意が必要であるが、では、時枝氏において文と句の違いは明瞭に示されたのであろうか。

時枝氏は、文末辞の「完結せる陳述作用」によって文が成立すると主張する。すなわち、(ロ)「山に登るは愉快なり。」の下線部末尾「登る」には「完結せる陳述作用」がないが、(イ)「山に登る。」の文には「完結せる陳述作用」があると把握するのである。この「完結せる陳述作用」は、先述の「切れる形」によって発揮されるのであるから、(イ)「山に登る。」においてはその表現末尾が終止形であるためにそこで表現が完結し「文」となるのだと理解されることになる。対する(ロ)の「山に登る」の「登る」は連体形であつて「切れる形」ではないため、文ではなく句であると認められるのである。このように、時枝氏は言語主体の主體的な表現たる「辞」の統一作用によって、文の内容としての句が成立し、最終的に表現末尾が「切れる形」をとることによって「完結せる陳述作用」が働き「文」が成立するのだと主張した。これが時枝氏に

おける「句」と「文」の相違に関する説明である。

この捉え方は、2.3節で山田氏の論の弱点（と解された点）の三つ目として掲げた「文を形態的に規定することができない」という問題にも一定の解答を与えることになる。時枝氏は、山田氏が「文」の「完結未完結」の問題を棚上げにしていることについて触れ、

山田博士は、文に於ける完結未完結といふことを不問に附せられ、文の単位を完結未完結を通じて句と名付け、文を専ら統覚作用の存在によつてのみ定義付けようとしてゐることは、前項に述べたことであるが、かゝる内面的な統一と同時に、文の成立に語形式の完結未完結が重要であることは、歌学及び国語研究の歴史に於いて、古くからこれを問題にして来たことによつても知ることが出来るのである。（時枝 1941：363）

上記の完結未完結の問題について、やはり形態的な側面（次の引用部分においては「語形変化」）から答えようとするのである。

水流る。 花美し。

が、文と考へられるのは、それが主語述語を有するが為でもなく、又陳述作用を伴ふ為のみでもなく、実に完結せる陳述作用がある為に、文と認識され、統一した思想の表現と考へ得られるのである。右の如き方法によつて、辞即ち助詞助動詞について、完結するものと未完結なものとを区別して、文認識の基礎とすることが出来るであらう。語形変化によつて語の接続を形造る国語に於いては、文の完結が、話者の主体的活動の表現と同様に、語の形式の上に明示されてゐるといふことは、接続によつて語形式を変化させることのない印欧語と比較して、国語の特質を物語る一の点であると思ふ。

（時枝 1941：356-357）

つまり、時枝氏によれば文の完結は「語の形式の上に明示されてゐる」ことになるのであるから、文は形態的に規定することが可能であるということになる。もっとも、文を形態的に規定しようとする試み、すなわち「切れる形」によって文が成立するという把握は、続稿で述べる通り、渡辺実氏によって批判されることになる。

最後に、2.3節で山田氏の論の弱点（と解された点）の二つ目として掲げた、「二種の句（述体句と喚体句）が共に「句」でありながら統一的に説明できない」という点を検討しておこう。山田（1936：935）は述体句と喚体句について「根本的に差別ある二種の発表形式」であると主張しており、その思想発表の形式の違いを維持しようとするが、時枝氏はそれを一元的に説明しようとする。時枝氏によれば、述体句も喚体句ともに文末辞の「完結せる陳述作用」によつて統一的に説明されることになる。たとえば、述体句から成る「花赤し。」や喚体句から成る「妙なる笛の音よ。」は、それぞれ

花赤し ■

妙なる笛の音 〇

というように、ともに詞＋文末辞として、つまり同一の構造をもつものとして統一的に把握されることになるのである。

ここまで見てきたように、山田氏の文成立論が抱えていた（と解された）難点は、上述の詞辞論（詞辞非連続説）を基本とする、零記号の辞の発案や「切れる形」「語形変化」への注目によって見事克服されたのだと、一旦は了解しておくことができる。

ただ、時枝氏の文成立論も後世の学者には批判されることになる。その批判は、（先ほど検討した「切れる形」を除けば）時枝氏の理論の根幹をなす「詞辞論」に向かうことになる。本稿はあくまで文成立論の展開を追うものであるため、時枝氏の詞辞論およびその批判に深く立ち入ることはしないが、時枝氏が山田氏の論の難点を乗り越え自身の文成立論を推し進める際に使用した道具立てのうち、特に詞辞非連続説や零記号の辞に対して、疑問や批判が投げかけられることになるのである<sup>8</sup>。

#### 4 小括

ここで小括として各論者における文規定を確認しておきたい。

まず、山田氏より前の文成立論においては、たとえば大槻氏が「文ニハ、必ず、主語ト説明語トアルヲ要ス」と説くように、「文＝主語＋説明語（述語）」という構造をもつものとして了解されるものであった。その文観を否定した山田氏にあっては、文は「統覚作用によりて統合せられたる思想が、言語といふ形式によりて表現せられたるもの」と規定されるものであった。また、その乗り越えを図る時枝氏は、文を「（一）具体的な思想の表現であること。（二）統一性があること。（三）完結性があること。」という三条件を備えたものとして見るのであった。

時枝氏は山田氏の論の弱点（と解された）3つすべてを解消したかに見えるが、それに続く文成立論では時枝氏の論のどこに問題を見出し、どのように解決するのだろうか。また、ここまで見てきた文成立論も含め、「従来の文成立研究が、話し手と聞き手という視点を超えた「超越的な視点」からの文成立論を志向するものであった」と言うことができるのだろうか。以降の検討の一切は、続稿「文成立論研究史抄（その2）」に持ち越されることとなる。

8 尾上（1990：6）は、時枝氏の構文論に対して提出された疑問、批判については「用言に辞的な側面を認めなくてよいのか」という疑問と、「辞の中にも客観的なものがあるのではないか」という批判との二点に要約できている。

【参考文献】

- 大木一夫（2015）「一回的文成立論と多段階的文成立論」『輔仁大学日本語日本文学』43, pp.17-36.
- 大木一夫（2017）『文論序説』ひつじ書房.
- 大槻文彦（1897）『広日本文典』（発行所名の記載なし）
- 尾上圭介（1990）「文法論－陳述論の誕生と終焉－」『国語と国文学』67-5, pp.1-16.
- 尾上圭介（1996）「文をどう見たか－述語論の学史的展開－」『日本語学』明治書院, 15-9, pp.4-12.
- 尾上圭介（2014）「陳述論<sup>1</sup>」日本語文法学会(編)『日本語文法事典』大修館書店pp.405-408.
- 小亀拓也（2021）「聞き手における文の認定」『日本語文法』21-2, pp.20-35, 日本語文法学会.
- 竹林一志（2004）『現代日本語における主部の本質と諸相』くろしお出版.
- 竹林一志（2008）『日本語における文の原理－日本語文法学要説－』くろしお出版.
- 竹林一志（2020）『文の成立と主語・述語』花鳥社.
- 時枝誠記（1941）『国語学原論－言語過程説の成立とその展開－』岩波書店.
- 時枝誠記（1950）『日本文法 口語篇』岩波書店.
- 時枝誠記（1955）『国語学原論 続篇』岩波書店.
- 仁田義雄（1977）「山田文法における文の認定」『日本語・日本文化』6, pp.73-110, 大阪外国語大学研究留学生別科.
- 仁田義雄（1978a）「時枝文法における文認定」『大阪外国語大学学報』42, pp.121-136.
- 仁田義雄（1978b）「渡辺実の構文論－文成立論を中心にして－」『日本語・日本文化』7, pp.25-41, 大阪外国語大学研究留学生別科.
- 仁田義雄（2005）『ある近代日本文法研究史』和泉書院.
- 仁田義雄（2014）「陳述論<sup>2</sup>」日本語文法学会(編)『日本語文法事典』大修館書店pp.408-410.
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- 山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館.
- 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館.

